

月刊

# アジアの友

MONTHLY The Asia-no Tomo

1

JANUARY

2110

中国 日本留学 30 周年を記念して  
ABK 同窓会（中国）結成大会開催



# 中国日本留学生 30 周年

## ABK 同窓会（中国）結成大会開催される

1979 年、戦後初めて中国留学生 18 名が政府より派遣され来日しました。その後当協会はアジア文化会館を始め、大森寮、太田記念館に留学生を迎え、勉学生活を支えました。

この時から 30 年たった 2009 年 12 月 13 日、北京大学において中国・北京在住の同窓生、来賓出席の下に、日本留学 30 周年を記念し、ABK 同窓会（中国）結成大会が開催されました。（詳細は P4 ～）



# 月刊 アジアの友

2010年1月号 第481号

## 目次

2	年頭のご挨拶	小木曾友 財団法人アジア学生文化協会理事長
4	巻頭	中国 日本留学 30 周年を記念して ABK 同窓会（中国）結成大会開催
10	アジア学生文化協会 50 周年記念文集より	「日本留学でのめぐり会い ー私の忘れえぬ人」 サヴィトリ ヴィシュワナヤン
12	留学生インタビュー	モッサン・サイドさん（パキスタン）
16	連載紀行文	写真家・鎌澤久也のメコンのほとりで・・・(第18回)「昌都」
17	知友会通信	奨学金・イベント情報
20	MEMBERS	ご入会・ご寄付のご報告（2009年12月）

### <表紙作品>

「雪の五稜郭（函館）」

わずか1泊の滞在だった函館。しかしこの五稜郭を初めとする歴史遺産、美しい夜景、そして美味しい海の幸と、どれもが最高で、また一ヶ所、日本のお気に入りが増えました。

### ★表紙作者

陳 俊銘

(Mr.JyunMing Chen)

2008 年来日。アジア学生文化協会日本語コース D 1 クラス所属。2010 年 4 月より東京商科学院に進学予定。

# 年頭のご挨拶

小木曾 友

謹んで新年のご挨拶を申し上げます。

幣協会の事業につきましては、平素より一方ならぬご支援・ご協力を賜り、心より御礼申し上げます。

さて、弊協会は、1957年設立以来52年間、アジア等諸国からの留学生が所期の目的を達成できるよう、また日本での留学を終えた後に、元留学生たち（日本留学同窓生）が自国の向上発展に資するのみならず、アジアをはじめ、広く世界にそのヒューマンネットワークの輪をひろげ、国際場裡で活躍する人材の養成に微力を尽くしてまいりました。協会がまがりなりにも50余年間、その活動を続けて来られたのも、内外の皆様の終始変わらぬご支援・ご鞭撻の賜物と心から感謝申し上げます。

さて、弊協会は、100年振りの公益法人制度改革による新しい法律が2008年12月1日に施行され、向こう5年間に新しい法人への移行を余儀なくされています。創立50周年に際し策定した長期計画のうち、最優先課題とした日本語教育部門の学校法人化計画は、現在、協会の新法人への移行問題とのからみの中で、その実現の最善策を模索しております。時間的な制約もあり、何とか来年中には具体化の緒に就きたいと念願しております。

なお、2008年10月、タイ国において、タイTPA、ABK-AOTS同窓会との共催により開催した第2回ABK同窓生フォーラムにおいての決議事項（フォーラムの記録と決議文は『月刊アジアの友』2009年1月号に掲載）は、徐々に実施に移されつつあります。即ち、2009年3月、ベトナム・ホーチミン市において行われた日本語教師研修講座には、協会日本語コースの専任講師が特別講師として参加協力し、また、同フォーラムに中国代表として参加した金東瀚北京



ABK 同窓会（中国）結成大会に招かれた小木曾理事長（右）  
李東翔 前駐日中国公使・教育参事官と

大学教授の献身的なご尽力により、2009年12月、ABK 同窓会（中国）結成大会が北京において開催され、中国において ABK 同窓会が正式に発足致しました。また、協会創設者穂積五一先生の思想と行動のエッセンスである「穂積精神」の継承と普及、ABK 同窓生間の相互交流とヒューマンネットワークの構築・拡大の促進を目的とした「ABK 同窓会（ABKD）ホームページ」(<http://abkd.p-kit.com/>)も、2009年11月に実現を見ております。

弊協会は純民間運営の財団法人であり財源に限りがあるため、今日まで、特に留学生宿舎、情報提供、「月刊アジアの友」発行、同窓会活動等の事業は皆様からお寄せいただいたご芳志によって支えられてきました。昨今の厳しい経済状況に鑑み、誠に恐縮に存じますが、会費・寄付・「アジアの友」購読費につきまして、倍旧のご支援・ご協力を賜りたく、衷心よりお願い申し上げます。

2010年1月

財団法人アジア学生文化協会  
理事長・校長 小木曾 友

# 中国 日本留学 30 周年を記念して ABK 同窓会 (中国) 結成大会開催



30年前の1979年4月、戦後初めて中国留学生18名が政府より派遣され来日しました。その後、当協会はアジア文化会館を始め、大森寮、太田記念館に留学生を迎え、勉学生活を支えました。2009年12月13日、北京大学において中国・北京在住の同窓生、来賓出席の下に、日本留学30周年を記念し、ABK同窓会(中国)結成大会が開催されました。

会はず、来賓の山田重夫駐中国日本公使のご挨拶に始まり、続いて、今大会の発起人を代表して、陳洪真鋼鉄研究院総院教授から経過報告、金東瀚北京大学教授から、1979年4月、中国からの戦後初めての留学生20数名をABKが受け入れた際の経緯、穂積五一先生との出逢い、今日に至るまでのABKとの関わりについて、詳細なご説明がありました。ついで、孫前進北京物質学院副教授より、同窓会の会則〔ABK同窓会(中国)章程〕案が説明され、全会一致で承認されました。

その後、ご来賓の彭家声北京大学教授(元駐日中国公使・教育参事官)、李東翔前駐日中国公使・教育参事官より、1979年当時、大使館に着任早々のお二人が、新たに来日する150名の中国留学生の宿舎の確保のため、ABKと協力して、東京中を東奔西走された苦労話が披露されました。東京からは私・小木曾と佃事務局長、加倉井会館担当が参加し、それぞれ謝辞を述べました。

その後、ご出席の方々(主としてABK、大森寮、太田記念館の出身者)から、次々と、ご挨拶や思い出話が披露され、最後にABKからの記念品贈呈、全員の記念撮影を行って、閉会しました。

その後、北京大学のレストランに移り、美味しい中国料理を堪能しながら、思い出話に花を咲かせました。  
(小木曾友 アジア学生文化協会理事長)

## ●主催者ご挨拶

金東瀚さん（北京大学教授）： 私たちは戦後中国の最初の留学生として1979年4月に日本に参りました。もう30何年前になります。日中友好の架け橋として日本に留学できることになって、大変ありがたく思っています。当時は大平内閣の時代で、文部大臣も大平さんが兼ねておりました。その日本政府の配慮で日本に行き、いろいろな会社で勉強をさせていただき、なおかつ日本のみなさんと親密な関係を持つことができたことを感謝しています。

そして、私たちの宿泊先となったのがアジア文化会館（ABK）でした。創設者である穂積五一先生はじめ、ABKの方々は中国の留学生に対してとても暖かく接してくれまして、おかげで私たちは日本でよく勉強することが出来ました。この場を借りて、日本政府のお世話になった方々、そして日中友好団体の方々、穂積五一先生をはじめとしたABKの皆様、当時の中国人留学生を代表して感謝の意を表します。

穂積先生は学生時代から侵略戦争に反対し、その後、アジアの国々の留学生受け入れのために奔走されました。特に中国人留学生の受け入れに関しては心配をしておられ、東京で一番多く中国人留学生を受け入れてくれたのがABKでした。そうしたこともあり、中国では留学生のことがあったら、みなABKに任せれば大丈夫というふうに言われていました。

また、穂積先生は中国だけではなく、タイ、ベトナム、ビルマ、フィリピン、シンガポール、台湾、韓国などアジア各国の留学生のために一生懸命に尽くしてくださいました。



金東瀚さん

私たちは中国の一番初めの留学生として、穂積先生には深い友情を感じています。その友情のおかげでよく勉強して帰り、中国建設のためにがんばることができました。

私は去年の11月、タイで開かれたABK創立50周年記念大会に出席しましたが、そこには500名もの元日本留学生が集まりました。タイのABK同窓会はとても活躍しており、私はそれを見て中国にもABK同窓会をつくるのはどうかと、みなに聞いてみたところ、賛同を得ることができ、本日設立大会を開くことができました。

もっとも、参加をしていただいた方というのは、全中国の中のまだ一部の人で、ABK（大森寮含む）と太田記念館の元在館生を合わせると、だいたい400人以上になります。

お仕事などの関係で本日来られなかった方もいるのですが、まだ連絡がとれないという方も数多くいらっしゃいます。そこで全体の大会は来年か再来年に行う予定です。

## ●来賓ご挨拶

彭家声さん（北京大学教授 元駐日中国公使・



彭家声さん

教育参事官)：日にちが経つのは早いですね。あっという間に30年が過ぎました。思えば、新中国の改革開放の初めの頃、中国は6つの先進各国に留学生を派遣しました。ちょうどその時、1979年7月3日、私と李東翔さんの2人は日本に赴任しました。私たちの任務は、中国の留学生に関連した業務を行うことでした。30年過ぎて、昔を時々懐かしく思い出します。

中国から日本に派遣する留学生のことで一番難しかったのは住居についてです。中国の大学はみな宿舎がありますが、日本は自分で探さなければなりません。そうした中、非常に感動したのはA B Kが18人も学生を受け入れていただいたということでした。特に職員寮を提供してまで中国の留学生を受け入れてくれたということに、本当にありがたく感じました。

その翌年からは毎年150名の中国人留学生を日本に派遣しましたが、みな東京を経由して日本各地に行きました。この150名の留学生を空港に向かえてからどこに行くか、非常に難しかったわけですが、穂積先生ほかA B Kのスタッフの皆様が東京都内をあちこち探

しまわり、大田区に大森寮を見つけ、ここに中国人留学生を入居させることになりました。留学生の来日する1週間前の話です。

私たちは空港に着いた学生達を、まず全員大森寮に入れて、1泊、2泊させてから各地に分散させました。その時A B Kのスタッフは家族の方も含めて、食事などいろいろとご配慮をいただき、非常に感動しました。本当にありがとうございました。

私にとって印象深かったのは、人の関係です。それは中国の留学生と我々、そして日本の友人の関係ですね。もう30年経ちましたが、時々その親しみを思い出します。

今、中国と日本の関係は良くなりました。次に両国人民は、心と心の付き合いをして、お互いを理解し合うということが非常に重要であると思います。これからの中日関係、青年の交流、学術文化における交流、いろいろな面の交流が非常に重要だと思えます。この交流を通してお互いが理解し合い、両国の、そして世界の平和のために努力しなければなりません。

**李東翔さん (前駐日中国大使・教育参事官)：**

日本留学30周年およびA B K同窓会設立大会に出席させていただき、まことに光栄に存じます。

今日はずっとA B Kに留学された元留学生、実は今日では有名な学者のみならず、久しぶりにお会いできて非常に嬉しく存じます。30年ほど前の事情を振り返ってみれば、いろいろな意味でいい思い出です。

とりわけ、A B Kの穂積理事長から今日の小木曾理事長まで、中日留学生交流にいろいろとご配慮をしてくださったことに、私たち留学生担当者、中日両国の教育担当だった者

はその事情をいつまでも忘れてはいけな  
 いと思います。

今日は同窓会設立ということで、非常に  
 素晴らしいことです。ABKには中日両国の留  
 学生交流のためにご協力をいただき、また中  
 日両国の友好関係を促進して下さったこと  
 に、私は心から感謝の意を申し上げたいと思  
 います。

同窓会の発展、皆様のご健康をお祈りいた  
 しまして、私の挨拶に代えさせていただきたく  
 と思います。どうも、おめでとうございます。

### ●参加者ご挨拶

**馬惠麗さん**（北京市 中日友好協会日本部副部  
 長）： 1990年に早稲田大学に留学した時、  
 太田記念館にお世話になりました。当時太田  
 記念館は設立したばかりで、私たちは第一期  
 生として宿泊することになり、太田記念館開  
 館式では私が留学生の代表として挨拶をしま  
 した。

結果的には半年しか住めませんでした  
 が、太田記念館のことは私に深い印象を残しま  
 した。その後、私の友達や同級生、また同僚な  
 どたくさんの方が太田記念館に泊まり、大変



馬惠麗さん

お世話になりました。

当時太田記念館の事務局に勤められていた  
 のが近藤さん、田井さん、加倉井さんで、み  
 なさんと親しく過ごしました。特に加倉井さ  
 んとは本当に親しくなり、お世話になりました。  
 またチャンスがあったら、もう一度太田  
 記念館に行きたいと思っています。

**李洪海さん**（北京市人民政府外事局局长）：

私は北京市の市役所に勤めていますが、  
 1985年と91年、2回ほど日本に留学をした  
 ことがあります。北京市と東京都との姉妹都  
 市の関係で、都庁で仕事をしながら都立大学  
 に1年半ほど留学しました。そして91年の1  
 年間太田記念館で加倉井さんにお世話にな  
 りました。今日は設立記念大会に参加できま  
 して、日本から来られたみなさんはもちろんの  
 こと、中国の、普段は簡単に会うことができ  
 ないような先生が大勢おられまして、そうし  
 た有名な先生のみなさんとお会いできて光栄  
 に思います。

私は今、北京市役所で海外文化交流の仕事  
 を担当しておりますので、何か同窓会のこと  
 で連絡がありましたら、私の方もできるだけ  
 協力させていただきたいと思っています。これか



李洪海さん



李洪海さん

らもよろしく  
お願いいたし  
ます。

ジャン シンイ  
さん（欧米同  
窓会中国日本  
留学分会常務  
副所長）： 留  
学していた当  
時は A B K と

直接関係はなかったのですが、入国した直後の1週間ほど、アジア文化会館に泊まったことがあります。当時、暖かい配慮とお世話をいただき、良い思い出になっております。

こうしたことから、私は A B K と何らかの縁があると言って過言ではないと思います。私が所属しているのは欧米同窓会で、規模の大きな留学生専門の組織です。私は96年に帰国しましたが、97年に留日分科会が欧米同窓会の中に新しく設立され、その時からずっとその副所長を担当しております。今日は、この同窓会のメンバーの何人もがうちのメンバーでもありますから、ここで皆様とお会いできて非常に嬉しく、これからもいっそうこうした機会を持てること、いっそうの発展をお祈りします。そして留日分科会としても、何かご協力できることがあれば、いっしょに手を携えてまいりたいと思います。これからもよろしくお願いいたします。

**賈蕙萱さん（留日学人活動ステーション代表）：**

私は北京大学国際関係学院を定年した教授の一人です。最初に、A B K 同窓会の設立に対して心からお祝いを申し上げます。

このような活動にお招きいただき、心から

嬉しく思います。ただ今たくさんの先生から A B K のスタッフの皆様いろいろな世話になった話を聞かせていただき、とても感謝感激しております。残念ながら私はアジア文化会館ならびに太田記念館に住んだことはありませんが、私の娘、高栄は太田記念館に1年間お世話になりました。彼女は当時やはり宿泊していた愛新覚羅の末裔である金秋さんと恋愛して結婚しました。今は2人の子供と4人で幸せに生活しています。

そうしたわけで、私は当時太田記念館で A B K のみなさんにお世話になった物語を拝聴したことがあります。この機会を借りて、親として心から感謝の意を申し上げます。

中国には「生命は運動にあり、機構は活動にあり」という言葉があります。

私の経験から見れば、一つの機構＝組織をつくったら、その能力に応じた活動をしなければなりません。活動が多いほど支持者は増えます。

日本には中国人留学生の会がありますが、中国に日本留学生愛護会のようなものができれば、交流活動がしやすいのではないかと思います。私はもう歳をとってできませんが、この席には政府機構、市役所の若いリーダーの方などいるので、可能性があるのなら交流の機会を増やすようにしていければいいのではないかと思います。

私が代表を務めているのは、日本留学



賈蕙萱さん

学人活動ステーションという、日本留学経験の学者や学生と一緒に作った組織で、1月19日に日本大使館に300人ほどが集まる新年の集いがあります。これは欧米同窓会日本分科会と私たちの二つの機構で一緒に行うという

ことで計画を立てました。今後はABK同窓会とも、いろいろと協力してやっていくことができると思います。

ABK同窓会設立が成功し、素晴らしい業績を収められるように心からお祈りいたします。

### 加倉井弘行 アジア文化会館

(元 大森寮、太田記念館管理スタッフ)

今まで知り合ったいろいろな世代の人と、北京大学の一堂を介して集まる事など考えたこともなかった。ABKのほかに、大森寮<sup>※1</sup>、太田記念館<sup>※2</sup>に住んでいたみなさんも参加したのである。ここまで事を進めるのには、さまざまな苦労があったろう。おかげで25年、20年、10年ぶり、それぞれ久しぶりの再会であった。

日中国交正常化後、第1期のABK中国留学生の蔡世雄さんが「私の息子は太田記念館に住んでいました」と話をし、中日友好協会理事でもある賈蕙萱さんは「高栄(元在館生)の母です」などいろいろな出会いもあった

参加した日本大使館の山田重夫公使が「30年前、日中交流の少ないとき苦労して留学され、今日の日中友好の礎を築いた皆さんに、頭が下がる思いである」と述べていた。

彭家声先生、李東翔先生(いずれも当時の中国大使館の留学生担当)の挨拶のなかで、大森寮創設時の苦労を笑いながら話していたが、正に礎を築いた二人ではなかろうか。

日中国交正常化後、第2期の留学生であった丁士育先生が「私たちは協力するが、若い人で活動してほしい」と述べていたが正直な話だろう。会ったこともない人間の縦と横を結ぶには相当な困難があるだろう。が、さらなる発展に期待したい。

(※1) 大森寮、1979年日中国交正常化後、日本は中国留学生を受け入れたが、宿舎は中国大使館で手配しなくてはならず、当協会の故穂積理事長に相談、大森に寮を創設したのである。

寮はおおよそ4畳半が45室であった。が、創設時一度に150人がまず大森寮に仮泊したのである。

(※2) 太田記念館、故太田宇之助(朝日新聞記者)が中国留学生の為に、東京都に寄付。当協会が1990年～2002年東京都より委託を受け運営。



元太田記念館寮生の馬さん(左)と筆者

アジア学生文化協会 50周年記念文集

日本留学でのめぐり合い —私の忘れえぬ人



## サヴィトリ ヴィシュワナタン (Prof. (Dr.) Savitri Vishwanathan)

私が日本に留学したのは1966～1968年の2年6か月間だった。文部省の国費留学生として日本へ行き、最初留学生会館で数か月を過ごした後、運良くアジア文化会館（ABK）に入館することができた。朝8時に東京外国語大学に着くように、毎日ABKから歩いて通ったが、ABKの立地は大変便利だった。

日本語の勉強と同時に博士論文のための資料集めも日本留学の主な目的だったため、他の大学などの図書館を訪ねたり、専門の先生方に会って話をすることも必要だった。しかし私は日本語である程度の話ができるようになるまで、そういった先生方に会うことを延期することにした。

訪ねて行った先生のところで、自分の研究テーマは日本研究に含まれていると思っていたのに、それは国際関係論だと、少し軽蔑の態度で迎えられたことがあった。また和文の目録を作るため手伝って欲しいと頼むと、本屋へ行っただけで見たらどうかと言われた。

紹介を受けた先生のところに勇気を出して面会に行った時「日本語がわかるのか？」と言われ、私の真剣な気持ちは理解されていないのだなと感じた。下手な日本語しか話せないと思われ、日本語の無能を口実として、私との話しを避けたかったのだと悲しくなった。日本語で話そうと努力していることをなぜ評価してくれな

いのかと思った。

私の苦勞を知っていたあるアメリカ人の有名な先生が、自宅に日本人の先生を招待し、私を紹介してくれたことがあった。しかし日本人の先生は私と話すことに興味を示さず、アメリカ人の先生も注意を促してくれたが、結局これからも頑張るって欲しいと激励してくださっただけだった。

このような環境の中、がっかりしたり、心細くなったりしながら、朝8時から午後2時半まで、外語大で日本語の勉強を続けた。しかし博士の研究テーマの勉強が進まないことが気になっていた。そんな時、ある先生に会うことができ、一縷の望みが見えた。

東京大学法学部の図書館を利用するため、法学部の教授の紹介が必要になり、日本の政治思想研究の長老と評価されていた先生のところを、恐る恐る訪ねて行った。私はインドで会ったことのある東大の先生の紹介状を持っていたが、それまでの経験から気はとても重かった。しかし思いがけないことに、その先生は非常に親切に私を迎えてくれ、日本での留学の目標を尋ね、早速図書館のフォームに判を押してくださった。

その方の笑顔と、友人のように私の気持ちを理解しているかのような話し方から、少しずつ私も自信を得るようになった。毎月判を押して

くださるたびに、私に勉強の進め方について聞いたり、他の学生との会話に私を参加させたり、自分のゼミと一緒に来て参加しないかと誘ってくれることもあった。私の英語日本語交じりの話に一生懸命耳を傾け、批評してくれた。また、私が書いた論文をよく読み、弱いところを指摘し、新しい見方を出すように励ましてくれた。日本へ来て初めて、指導教官でもない先生の下で、親切に平等な立場で学問の議論が許され、大変勉強になった。

日本人の行動、態度などについての私の苛立ちを素直に受け取り、なぜ日本人の行動がそうなっているのかを日本の歴史や社会構造などを基にして説明してくれた。そして他の文化に接するとき、早急に結論を出すことを避けるようにと諭してくれたのだった。

例えば、インド人は何か新しい物を見たら、その元について好奇心を持ち調べ始めるが、日本人は、その出来上がったものをどのように利用するかと考え、そして成功に導くのだということを教えてくれた。つまり問題の分析の仕方について、刺激を与えてくれたのだ。

一般に、日本人は島国根性から自分たちで限界を作り、卑屈になりがちで、日本人の話すことは仕方がないと思い、苛立たないほうが良いと聞かされてきた。しかし先生の伸び伸びとした話し方などから、そういう概念は正しくないと思うようになった。

日本人がインドで数人のインド人に会い、彼らは日本人の性格には合わないと考え、それをスタンダード化することで、インド人との共同活動はやりにくいと決め付ける。それと同じ間違いを私もしていたのではないかと考えるようになった。

普通、インド人はしつこいと思われているため、忙しい先生方は初対面の時は白い目で睨んでおいた方が良くと思われたのかもしれない。

それを、私は自分の真剣さを理解してくれないと思ひ込んだわけだが、誤解だった。

では、日本人がインド人の行動の動機を誤解する例を上げてみよう。

一度、インド史が専門の日本人の先生が、歴史学会の長老と評価されていたインド人の先生に面会を申し込み、時間を割いて欲しいと頼み、インド人の先生も快諾してくれたことがあった。

そのことを日本人に伝えたとき、有名な日本人の先生なら、多忙だから絶対時間をくれないだろう、きっとそのインドの先生は忙しくないのだろうと言われた。それを聞いて、最初は驚いたが、それをそのまま放っておくと、インド人に対する誤解が深まるだろうと思い、「日本人の先生は遠方から来た学者であり、その上、数日間しかインドに滞在できない人だから、他の仕事を後回しにして、会うことにしたのではないか」と私は説明を加えた。

それでその人が持っていた、日本人はよく働き暇もないけれど、インド人はあまり働かず、いつも暇だという誤解も解けたかもしれない。

さて、これまでこの文書を読んでくださった皆様の中には、日本留学でのめぐり会い、私の忘れえぬ東大の先生は誰か推測できた人もいるのではないだろうか。その先生は丸山真男教授だった。

Prof.(Dr.)Savitri Vishwanathan

Professor of Japanese Studies (Retd.)from University of Delhi

Email:saviam@dataone.in

在日中滞在先 アジア文化会館

在日期間 1966年4月～1968年9月



学会で訪れたフランス・ニースで

## ■ウィルスと戦うために

—— パキスタンの大学で修士までを終えられたんですね。

パキスタンでは医学部を卒業したのですが、患者さんの診療より研究に興味があり、修士に進みました。当時はポリオウィルス (PolioVirus) についての研究をしていましたが、日本に来たからはC型肝炎ウィルスについて研究をしています。

—— 医学の道を選んだ理由がありますか。

この道に進んだのは、私の希望ではなく父の希望です (笑)。父は医療関係の仕事をしており、私が子供の頃から医学の道に進んで欲しいと言っていました。ですから早くからそのための勉強もさせられました。パキスタンは高校卒業後にまずカレッジに入り、そこで医療分野とそれ以外のコースのどちらかを選択します。私は

医療分野に進み、その後大学に進学して4年間学びました (現在就学年限は5年間)。大学卒業後は修士課程に進みましたが、パキスタンはお金のある国ではありませんから、大学の施設面では不満を感じていました。私はウィルスについての研究をしたかったのですが、どうやったら満足できる研究ができるのかと考え、修士が終わったら海外に留学することを決めました。そしていくつかの国の奨学金に申し込みました。

実は最初に受かったのはドイツの奨学金で、それから3か月ほどドイツ語の勉強をしていたのですが、ちょうどその時、日本の奨学生試験にも合格し、非常に迷いました。

—— なぜ日本を選ばれたのでしょうか。

ドイツにはC型肝炎ウィルスについて研究をしている優秀なグループが見つからなかったからです。一方で日本ではC型肝炎ウィルスが関

題になっており、その分野の研究をしている有名な先生も見つかったため、日本で学ぶことを決めました。

—— **なぜC型肝炎を研究しようと思ったのでしょうか。**

C型肝炎ウイルスはパキスタンでは今大きな問題になっています。しかし、このウイルスにはワクチンがなく、良い薬也没有。ですから多くの研究者がC型肝炎ウイルスのワクチンと薬を作るため、様々な研究を行っており、自分もこのウイルスを研究してみたいと思ったんです。

—— **パキスタンではなぜC型肝炎ウイルスの感染が広がっているのでしょうか。**

残念ながらパキスタンの場合は覚醒剤などのドラッグをやる人が多く、その注射針の使い回しでC型肝炎ウイルスが拡大しています。また輸血による感染の場合ですが、日本やアメリカなどの先進国は採血の際、血液にC型肝炎ウイルスがあるかどうか確認し、ウイルスが見つければ当然その血液は使いません。しかしパキスタンの場合はC型肝炎ウイルスについてはチェックしていませんから、他のウイルスが見つからなければその血液はパスしてしまい、そこにC型肝炎ウイルスがあれば、輸血された人にも感染してしまいます。貧しい国の場合は、こうした問題が依然として残っています。もちろん政府はきちんと検査するように指示をしていますが、血液センターではコストがかかるという理由で行っていないんです。

また、医者がある患者に使った注射針をまた別の人に使えば、それも感染の原因となります。今の日本でそのようなことはあり得ないと思いますが、パキスタンではコスト面からそうする医者がいることも事実です。

—— **日本の現状はいかがですか。**

日本の場合は血液センターがC型肝炎ウイルスの検査を始めたのが1989年12月以降のため、ほとんどの輸血による感染はそれ以前に起こったということになります。

また、肝細胞から発生するガンの原因にはB型肝炎、NASH（非アルコール性脂肪性肝炎）、アルコール性肝炎などがありますが、日本はC型肝炎によるものが非常に多いため、ワクチンの開発が課題になっているわけです。

## ■日本での研究生活

—— **日本語は日本に来てから学ばれたのでしょうか。**

日本に来るまではまったく日本語に触れたことはありませんでした。ですから日本に来て最初の3か月は日本語の勉強をしましたが、その時は本当にがんばって、クラスで一番の高得点を取り、修了時には学生を代表してスピーチも行いました。

—— **とても流ちょうな日本語を話されますが、どのように勉強したのでしょうか。**

例えば学校から帰る時、途中で日本人に話しかけて、「電話をしたいけど、どうやったらできるか?」とか、「駅に行きたいけど、どうやって



日本語研修を首席で修了!



学会が行われたフランス・ニースで  
脇田隆字先生（中央）、研究員たちと

行ったらいいか？」と、もちろん知っているのですが、そうした質問をしてみました。そうやって日本人が説明してくれる日本語を理解すると、コミュニケーションの仕方を学びました。そんな悪いことをやっていたのですが（笑）、みなさん親切に教えてくれて、本当に感謝しています。日本語を勉強しないと日本での生活は難しく大変になりますから、何が何でも最低限の日本語は身に付ける必要はあると思います。

—— 今の研究室には、ほかの留学生も所属しているのでしょうか。

脇田ラボは大きな研究室で、メンバーは30人以上います。そのうち留学生は現在3人で、私のほかはミャンマー人と韓国人です。

—— 期待通りの研究ができていますか。

すごく満足しています。最初にやりたかった仕事は先生に却下されてしまったのですが（笑）、代わりに先生から勧められた仕事をやっているうちにだんだんと興味が出てきて、今はすごく毎日が楽しみになっています。国立感染症研究所はウィルスの研究では日本のトップレベルですから、素晴らしい研究員の方がそろっていて、刺激を受け、学べることも多い。そういった点は非常に満足しています。実は先日、先生と一

緒にフランスの大きな国際会議に参加したのですが、各国で同じ分野を研究する人たちと自分のことを比べてみて、その満足度は増しました。

—— 不満に感じることはありませんか。

毎週1回のラボミーティングで研究員の中の2人が自分の仕事を説明するのですが、それは全て日本語なので私にはあまりわかりません。逆に私は自分の仕事を英語で発表しているので、それもわからない人はいると思います。私自身は研究のため、皆がしている仕事を全てわかっておきたい

のですが、それができない。その部分は不満です。

時々私は日本で行われる国際会議にも出席しますが、そういう学会は英語で進められますから、内容が全て分かって嬉しくなります。もちろん日本人も英語で発表するのですが、うちの学生達はプレッシャーがすごくあるようです。こうした国際舞台はもちろんですが、優秀な留学生に研究室に来てもらいたい場合なども含めて、日本人はもっと英語の力を磨いたほうがいいと思いますね。

—— では日本での生活はいかがですか？

日本での生活にもすごく満足しています。日本人はとてもフレンドリーですよ。普通は日本人から話しかけては来ませんが、こちらが何か話すと、きちんと答えてくれる。困った時も日本人に聞けば親切に助けてくれます。そして何より素晴らしいのはすごく安全だということです。生活をする上で、これ以上重要なことは無いと思います。

—— 驚いたことなどはありますか？

電車を待つ時やお店に入る時など、日本人は列を作って並びますね。日本人には当たり前のことなのかもしれませんが、パキスタンではそんなことはあり得ませんから、本当に感動しま



NHK ラジオ国際放送で  
ウルドゥー語セクションの仲間と

した（笑）。また、電車が混んでいて駅員が乗客を押し込んでいる光景も初めて見た時はびくして面白かったのですが、今は慣れて、自分が押し込まれても平気ですね（笑）。

来日前に心配した食べ物についてですが、私はイスラム教ですから気をつけないといけない場合が多い。また、生ものが苦手なので、食べられないものもありますが、逆に好きなものも多くて、天ぷらやみそ汁、魚のフライ、おにぎりなどは大好きです。

—— 研究室以外で楽しみなことはありますか。

私はNHKラジオの国際放送で毎週末、ウルドゥー語のアナウンサーをしています。国にいた時も、週末はFMのDJの仕事をしていました。パキスタンでは、昼間や平日は普通の仕事をしています。夜や週末にラジオのパーソナリティーを務める人が大勢います。私もそうしたDJの一人だったのですが、ファンが増えてきたところで日本に行くことが決まったので、辞めるのは少し寂しかったですね。

そうしたこともあり、日本でもメディアの仕事をやってみたいと思いNHKのオーディションを受けてみたくです。もちろん仕事はDJとは違いますが、私はこの仕事が楽しくて好きですし、

放送局ではほかのパキスタン人たちと会って、いろいろなことを話したりすることでリフレッシュできるんです。

## ■日本留学のための心構え

—— 後輩のパキスタン人には、日本で勉強することを勧められますか？

医学部で研究をしているパキスタン人の友達の中には、研究が進んでいない、先生がアドバイスをくれないなどで悩んでいる人はいます。ですがそれは国では

なくて研究室による問題で、アメリカで学んでいる友達の中にも同じ理由で悩んでいる人はいます。ですから、自分が学ぼうとする研究室のアクティビティーはどうかということをよく調べて研究室を選ばないと、そういった状況に置かれてしまうかもしれないということです。ただそれを事前に見極めるのは難しいのかもしれない。

国の違いによる困難があるとすれば、それは言語です。日本留学を考えているパキスタン人にアドバイスをするとすれば、日本に来ることには賛成しますが、その前提として日本語を一生懸命勉強しなければいけないということです。例え英語で学ぶことが許可されている場合でも、まず日本語を学ぶ意思がなければ、日本での良い研究、良い生活はできないでしょう。

—— 今後の予定を聞かせてください。

卒業は2011年3月の予定です。その後はポストドクターをやりたいと思っています。日本でも海外のどこかの国でも、良いチャンスがあればどこにでも行くつもりです。そのために今年はいい論文をどんどん書きたいと思っています。

—— これからの更なるご活躍を期待しています。ありがとうございました。

# メコンのほとりです。

## 十八、昌都

まわりの景色が緑色から徐々に黄色に変わる頃、天空の大地をアツプダウンを繰り返しながら、谷間に点状にする集落を横目に進んだ。徳格をでて四川省からチベット自治区に入ると、五千メートル前後の峠もあったが、予想に反し低地が多いため、遊牧生活だけでなく農耕生活も行なわれていた。

移動しているうちに真っ暗になり、曲がりくねった坂道をヘッドライトの明かりだけを便りに下っていると、遠くにまばゆいばかりの明かりが見え隠れた。東部チベット最大の街昌都だ。標高は三二五〇メートル。街を二分するようにメコン川（瀾滄江）が流れていた。

昌都は小高い丘に建つ「チャムパリン・ゴンパ」という寺を中心の開けた街だ。この寺はゲルク派（黄色の帽子を被っていることから黄帽派ともいい、現在チベット仏教の主流）の開祖ツォンカバの提案で弟子が建立し、僧が二千人とも三千人ともいわれる、カム地方（青海省南東部から雲南省西北部）最大の寺院で、戒律が厳しいことで知られている。

街を見学しながらチャムパリン・ゴンパに行くと、ちょうど本堂で大勢の僧が何列にも並んで座り、お経を唱えていた。グオオーンという低音の響きが広い本堂にこだまし、聞いているうちに心が癒されていくようで、何とも



いえない気持ちにさせてくれる。しばらくそうした雰囲気味わい、別の建物の中に入っていくと、僧が四人いて、太鼓を叩きながらここでもお経を唱えていた。そして厨房にいくと、大きな

釜で2人の僧がゆっくり攪拌しながら、バター茶をつくっていた。

と、急に厨房が慌ただしくなったと思ったら、十人ほど若い僧が駆け込んできて、桶にできたばかりのバター茶を入れ、走って本堂に向かうではないか。お茶の時間になったのだ。彼らと一緒にほくも本堂に戻ると、体格のいい二人の僧が、ついでいくところを支持している。若い僧は支持された順にバター茶を待ち構えている僧の器に分ける。溶けていないバターも多くあり、それを器に分けてもらった僧は嬉しそうにしていた。桶が空になると若い僧は小走りで厨房に戻り、また桶いっぱいバター茶を入れて戻ってくる。大急ぎで次のバター茶を持ってこなければ、どやされてしまうのだ。急がせるのは熱いうちにうまいバター茶を飲むということもあるのだろうが、ほくにはチベット仏教の規律、厳しさといったものを、日常的なことを通して教えているように見受けられた。

〈写真〉チベット族に欠かせない飲み物であるバター茶を大きな釜で作る僧侶たち。ちなみに厨房には女性は立ち入り禁止である。

かまざわきゅうや・・・(社)日本写真家協会(JPS)会員、駒澤女子大学非常勤講師

中国雲南省を中心にアジアを撮り続ける。近年はメコン川、長江など、川をテーマにそこに暮らす人々に焦点を当てている。「メコン街道」など写真展を多く開催。著書に『雲南最深部への旅』(めこん)、『メコン街道』(水曜社)等



## にゅうかんほうじょうほう 入管法情報

### ▶ 留学生の在留資格が一つに

2010年7月1日から「就学ビザ」がなくなり、すべて「留学ビザ」になります。

留学ビザの在留期間は、①2年3か月、②2年、③1年3か月、④1年です。

就学ビザの学生は、7月1日時点で活動内容に変更がなければ（＝そのまま日本語学校に在籍しているのであれば）、7月1日にすぐに留学ビザに変更の手続きをする必要はありません。

### ▶ 在留資格変更、期間更新のための申請書が変更

今年の4月から専門学校や大学に進学する日本語学校生は、就学ビザから留学ビザへの「在留資格変更」の手続きをしなければなりません。

また、留学ビザをもっている日本語学校生でも、2～3月にビザの期間が切れる場合は「在留期間更新」の手続きをしなければなりません。

申請書のダウンロード URL <http://www.moj.go.jp/ONLINE/IMMIGRATION/16-2-1.html>

## しょうがくきんじょうほう 奨学金情報

### ■ 加藤朝雄国際奨学財団奨学金

対象：①アジアからの留学生で、大学学部（3、4年次）、修士、博士課程に在籍の者 ②学部生30歳程度以下、修士課程35歳程度以下、博士課程40歳程度以下 ③指定大学に在籍している者。指定大学：京都、京都工芸繊維、京都市立芸術、愛知学院、大阪商業、

きょうとがいこくご りつめいかん りゅうこく  
京都外国語、立命館、龍谷、全8校

きゅうふきんがく げつがく えん  
給付金額：月額 100,000 円

きゅうふきかん ねんかん  
給付期間：2年間（最終学年生は1年間）

おうぼ していだいがく たんとうまどぐち  
応募：指定大学の担当窓口

ぼしゅうきかん しめきり  
募集期間：3月12日締切

### ■ 神林留学生奨学会

対象：①東および東南アジア地域の

しゅつしんしゃ かんとうちく していだいがくいん  
**出身者** ② 関東地区の指定大学院  
 (とうきょうだいがく つくばだいがく とうきょうけいざいだいがく  
 慶應義塾大学、筑波大学、東京経済大学、  
 けいおうぎじゅくだいがく しんしゅうだいがく つくばだいがく  
 慶應義塾大学、信州大学、茨城大学、  
 わせだいがく ひとつばだいがく ほうせいだいがく とうきょう  
 早稲田大学、一橋大学、法政大学、東京  
 のうこうだいがく ちゅうみずじょだいがく とうきょうけいじつだいがく  
 農工大学、お茶の水女子大学、東京芸術大学、  
 とうきょうがいこくごだいがく しんしゅうだいがく つくばだいがく  
 東京外国語大学、武蔵野音楽大学、  
 ちゅうおうだいがく むさしのびじゅつだいがく こまざわだいがく  
 中央大学、武蔵野美術大学、駒澤大学、  
 とうきょういかしかだいがく とうきょうのうぎょうだいがく にほんだいがく  
 東京医科歯科大学、東京農業大学、日本大学、  
 とうきょうかいようだいがく にほんじょしだいがく ていきょうだいがく  
 東京海洋大学、日本女子大学、帝京大学、  
 りゅうつうけいざいだいがく ちばだいがく こくさいきりすときょうだいがく  
 流通経済大学、千葉大学、国際基督教大学、  
 れいたくだいがく ざいせき もの  
 麗澤大学) に在籍する者 ③ 4月1日現在、

大学院に1年以上在学する留学生。  
 きゅうふきんがく げつがく えん  
**給付金額**：月額120,000円  
 さいようになんずう めいていど  
**採用人数**：10名程度  
 きゅうふきんがく がつ よくとし がつ ねんかん  
**給付期間**：4月から翌年3月までの1年間  
 えんちゆうか  
 (延長可)  
 おうぼ していだいがく たんとうまどぐち  
**応募**：指定大学の担当窓口  
 ほしゅうきかん がつまつしめきり  
**募集期間**：3月末締切

くまひらしょうがくかい  
**熊平奨学会**

たいしやう ひろしまけんない だいがく がくぶ しゅうし はくし  
**対象**：広島県内の大学(学部・修士、博士)  
 ざいせき しひりゅうがくせい  
 に在籍する私費留学生  
 きゅうふきんがく げつがく えん  
**給付金額**：月額70,000円  
 さいようになんずう じん  
**採用人数**：50人  
 きゅうふきんがく ねんかん  
**給付期間**：1年間  
 おうぼ だいがく たんとうまどぐち  
**応募**：大学の担当窓口  
 ほしゅうきかん ちゅうじゅんしめきり  
**募集期間**：3月中旬締切

こうなん こくさいしやうがくざいだん  
**興南アジア国際奨学財団**

たいしやう しょうこく りゅうがくせい きゅうしゅうちく  
**対象**：①アジア諸国からの留学生で九州地区  
 の国公立大学(指定校)に在籍する者 ②  
 がくぶ ねんじ ねんじ しゅうし ねんじ  
 学部(4年次または6年次)、修士(2年次)、  
 かくし ねんじ ねんじ がくぶ ざい  
 博士(3年次または4年次) ③学部30歳、  
 しゅうし はくし さい  
 修士・博士35歳くらいまで ④月30,000円

ちやうふくじゆきゆうか  
**までの重複受給可**

きゅうふきんがく げつがく えん  
**給付金額**：月額70,000円  
 さいようになんずう めい よてい  
**採用人数**：30名(予定)  
 きゅうふきんがく ねんかん  
**給付期間**：1年間  
 おうぼ していだいがく たんとうまどぐち  
**応募**：指定大学の担当窓口  
 ほしゅうきかん まつしめきり  
**募集期間**：3月末締切

**■辻アジア国際奨学財団**

たいしやう しょうこく しひりゅうがくせい  
**対象**：①アジア諸国からの私費留学生 ②  
 指定校(毎年度指定)の学部(3年次・4年次)、  
 しゅうし はくし ざいせき もの つき えん  
 修士、博士に在籍する者 ③月50,000円ま

ちやうふくじゆきゆうか  
**での重複受給可**

きゅうふきんがく げつがく えん  
**給付金額**：月額100,000円  
 さいようになんずう めいていど  
**採用人数**：15名程度  
 きゅうふきんがく ねんかん  
**給付期間**：1年間  
 おうぼ していだいがく たんとうまどぐち  
**応募**：指定大学の担当窓口  
 ほしゅうきかん がつしじゅんしめきり  
**募集期間**：3月初旬締切

とうあひりゅうがくせいこくゆうがい  
**東亜留学生生友会**

たいしやう しょうこく かんこく  
**対象**：①インドネシア・韓国・シンガポ  
 ル・タイ・台湾・フィリピン・ベトナム・  
 ほんこん たいわん  
 香港・マカオ・マレーシア・ラオスからの  
 りゅうがくせい していこう りこうけいぶん や せんこう  
 留学生で、指定校にて理工系分野を専攻  
 する大学院生(修士、博士) ②指定校  
 とうきょうだいがく とうきょうこうぎょうだいがく よこはまこくりつだいがく  
 (東京大学、東京工業大学、横浜国立大学、  
 わせだいがく けいおうぎじゅくだいがく つき えん  
 早稲田大学、慶應義塾大学) ③月50,000円

ちやうふくじゆきゆうか  
**までの重複受給可**

きゅうふきんがく げつがく えん  
**給付金額**：月額70,000円  
 さいようになんずう めいていど  
**採用人数**：10名程度  
 きゅうふきんがく ねんかん  
**給付期間**：4月から1年間  
 おうぼ していだいがく たんとうまどぐち  
**応募**：指定大学の担当窓口  
 ほしゅうきかん がつちゅうじゅんしめきり  
**募集期間**：3月中旬締切

## イベント情報

留学生就職支援OB・OG懇親会

第1回 聞いてみよう、話してみよう、日本での就職

1. 日本で働く先輩留学生の体験談・働いて感じる本音を聞く会

2. 少人数グループによる先輩留学生との交流会

<日時> 2010年2月13日(土) 13:30～16:30

<受付> 13:00より

<場所> 東京YWCA会館 カフマンホール

<参加費> 無料

<申込> <http://www.tokyo.ywca.or.jp/ryugakusei/undo-info.html>

<主催> 東京YWCA「留学生の母親」運動 留学生就職支援OB OG懇談会

<問合せ> 東京YWCA「留学生の母親」

〒101-0062 千代田区神田駿河台1-8-11 ☎03-3293-5424

・主催:東京YWCA「留学生の母親」運動 留学生就職支援OB OG懇談会

第17回 留学生スキー & スノボ交流会

日本での大切な思い出となるだけでなく、たくさんの新しい友達ができる絶好のチャンスです。スキーやスノボが上手な人も初めての人も思いきって参加してみてください。

<日程> 2010年2月28日(日)～3月3日(水)

<スキー場/宿泊施設> 雪だるま高原 キューピットパレイ (新潟県上越市安塚区須川)

<参加費> 29,800円

<締切り> 2010年2月22日(月)

<問合せ> NPO 法人 国際青少年交流協会

〒169-0075 東京都新宿区高田馬場1-33-5 タケトモビル2F

☎03-6681-6591 FAX 03-5292-4866 E-mail [info@kokusaikoryu.com](mailto:info@kokusaikoryu.com)

<詳細情報> <http://www.kokusaikoryu.com>

「外国人の見る日本」コラムコンテスト あなたのコラムが世界に発信されます!!

Global Voices from Japan は、外国人が日本人とは異なる視点で見た「日本」についての時事評論や日々の生活、文化に関するコラムを募集します。優秀なコラムは日、英、中、韓の4言語に翻訳され、Global Voices from Japan のホームページに掲載するとともに共同通信の Web、メディアを通じて世

かい ほっしん  
界に発信されます。

1. 応募コラムのテーマは、「外国人の見る日本」です。主題と内容は自由です。さまざまな題材から日本を浮き彫りにし、海外で紹介するコラムを書いて応募してください。
2. 使用言語は日、英、中、韓の4言語であればどの言語でも応募できます。
3. 日本に留学する、在住する、仕事をする、日本の研究をするなどなど、日本に関係するあるいは日本に興味をもつ外国人であれば、どなたでも応募できます。
4. 優秀なコラムには賞金と記念品が贈られ、共同通信のWeb. メディアから世界に発信されます。最優秀賞1名賞金300,000円 優秀賞3名賞金100,000円 特別賞若干名留学生優秀賞、海外日本研究者優秀賞、海外日本語学習者賞等を選定
5. 募集期間 2010年1月12日～2010年3月31日まで
6. 連絡事務所/問合せ先 Global Voices from Japan 「外国人の見る日本」コラムコンテスト 実行委員会 〒150-0047 東京都渋谷区神山町5-17 アジア21世紀奨学財団内 ☎03-3460-2100

E-mail:info@glovoicesjp.com

# MEMBERS

〈ご入会とご寄付の報告〉

2009年12月

## 賛助会員

香取 純一 千代田区

## 正会員

(1口)  
高柳 直正 北区  
松岡 弘 相模原市  
天野 高明 白井市  
早乙女 和義/博子 品川区  
大木 隆二 福岡市  
金野 隆光 柏市  
代田 泰彦/ますよ 所沢市  
菊池 幸子 笠間市  
見戸 義英/洋子 横浜市  
富永 昭太郎 町田市  
小川 輝夫 上尾市  
横見 美昭 文京区  
高木 桂子 墨田区  
池田 俊二 横浜市

北林 保之  
中元 管根  
小木 曾建  
工藤 幹雄  
榑 正義/正子  
小川 巖  
池森 亨介  
小原 正敏  
名越 修  
川口 善行  
福 壤二  
寺尾 方孝/三枝子  
大田原康彦/真澄  
香月 恵美子  
樋口 隆一  
辻 昌徳  
古谷 馨/恵美子  
曾根 文子  
LIN 林 登居/ひさ子  
三上 英満  
池野 朋彦/晶子  
山田 侃  
井上 駿  
鶴尾 能子

中川 郡  
西之表市  
世田谷区  
文京区  
港区  
入間市  
宇都宮市  
土浦市  
三浦郡  
大田区  
横須賀市  
国分寺市  
中央区  
川西市  
文京区  
国分寺市  
文京区  
杉並区  
八千代市  
世田谷区  
横浜市  
戸田市  
平塚市  
横浜市

林 操  
竹林 惟允  
菅谷 真人  
熊沢 敏一  
昌谷 春海  
久保 亨  
大里 浩秋  
鶴田 純一/由美  
川崎 依邦  
東京第一友の会  
栗原 静子  
鶴尾 能子  
太田 三郎/京子  
天野 高明  
宅間 董  
斎木 史  
岡崎 道子  
金野 隆光  
小山内 美江子  
高橋 作太郎  
田中 宏  
鶴田 純一/由美  
本間 邦子

下伊那郡  
練馬区  
千葉市  
松戸市  
町田市  
文京区  
逗子市  
千葉市  
大阪市  
豊島区  
気仙沼市  
横浜市  
神戸市  
白井市  
川崎市  
足立区  
池田市  
柏市  
横浜市  
静岡市  
足立区  
千葉市  
八王子市

## ご寄付

## ご入会とご寄付のお願い

当協会は、政府の補助金を受けていない純民間運営の公益法人ですので、財源に限りがあり、皆様方からお送りいただく会費、寄付金は、本協会の活動を支える貴重な財源となっています。何卒ご理解、ご協力をお願い致します。

## 協会のあらまし

名称：財団法人アジア学生文化協会

ASIAN STUDENTS CULTURAL ASSOCIATION  
(ASCA)

所在地：東京都文京区本駒込2丁目12番地13号

代表者：理事長 小木曾 友

設立：1957年（昭和32年）9月18日  
故穂積五一氏創設

目的：日本とアジア諸国の青年学生が共同生活を通じて、人間的和合と学術、文化および経済の交流をはかることにより、アジアの親善と世界の平和に貢献することを目的とする。

## ◆主な事業◆

- (1) 留学生宿舍の運営
- (2) 留学生日本語コースの運営（進学希望者向けの日本語を中心とする教育）
- (3) 留学生に対する情報提供支援
- (4) アジア語学セミナー、タイ語検定試験の開催
- (5) 帰国留学生のアジア文化会館同窓会、(社)日・タイ経済協力協会、ABK留学生友の会との連携・協力

## ◆会費（年額）◆

正会員 1口 1万円

賛助会員 1口 5万円

特別会員 1口 10万円


会員には広報誌「月刊アジアの友」が無料配布されます。また、広報誌購入だけを希望される方には、購読料年間3千円（学生2千円）でお送りしています。

## 本誌で広告してみませんか。

団体・企業を問わず、編集部へご相談ください。

日本留学生活に必要な最新のニュースを  
毎月届けます！

## ABK留学生メールニュース



ビザ手続き関連情報 医療・保険情報  
就職アルバイト情報 イベント情報  
各種試験情報 奨学金情報  
外国人相談情報 他

登録はWEBから

<http://www.jpss.jp>

月刊 **アジアの友** 2010年1月号

2010年1月10日発行（通刊第481号）

年間購読（送料共）3,000円（学生2,000円） 1部 300円（税込）

発行人 小木曾 友

編集 月刊アジアの友編集部

発行所 財団法人 アジア学生文化協会

東京都文京区本駒込2-12-13 (☎113-8642)

電話番号：03-3946-7565/4121 ファクシミリ：03-3946-7599

振替口座：00150-0-56754 E-mail：tomo@abk.or.jp

ホームページ：(<http://www.abk.or.jp/>)

published by ASIAN STUDENTS CULTURAL ASSOCIATION  
(ASIA BUNKA KAIKAN)

2-12-13, Honkomagome, Bunkyo-ku, Tokyo, 113-8642, JAPAN

☎+81-3-3946-7565/4121 ☎+81-3-3946-7599

Email：tomo@abk.or.jp

Home Page：(<http://www.abk.or.jp/>)

「月刊アジアの友」の購読会員（年3,000円・学生2,000）にご入会下さい。振替用紙又は電話等にて。

# 私費外国人留学生のための 大学入学案内

2010年度版

## 私費外国人留学生のための 大学入学案内

日本留学試験のデータも充実  
全国581大学・短期大学の入試のすべてがわかる  
いきたい大学がすぐ探せる“学部・学科インデックス”

留学生の大学選びは

この一冊にお任せ下さい！

2010年度版好評発売中！

編集・発行：(財) アジア学生文化協会 発売：凡人社 ¥ 2,000 + 税

お問合せ：☎ 03-3946-7565 E-mail hoshi@abk.or.jp